

たったひとりの戦争

sample

sample

池上真子  
訳

## 第一章 鏡の中の光

たったひとりの戦争とは、片方の手のひらでわれとわが頬を叩き、一枚の壁でわれとわが身を遮断し、一輪の花がわれとわが身を滅ぼすことを意味する。たったひとりの戦争とは、ひとりの女がわれとわが身に嫁することを意味する。

その女は鏡の中に自分の姿を見る。それはナルシスティックな愛であふれているが、一方ではほのかに自虐的な気持ちをも抱いている。われとわが身に嫁する女はみな、双頭の怪獣のように、相入れない二面性を持っている。

ひんやりとした絹が女の熱い肌に触れたとたん、名状しがたい巨大な器官が全身で働きだしたかのようになった。女は自分が水の中をたゆたっているように感じた。その手が波型の身体の上で起伏をくりかえすと、体の奥深くにある泉の水が絶え間なく迸り、女は透明な液体に浸された。女は必死にもがき、唇を半開きにして、きわどい声で喘いだ。女の手はまさぐりながら、ためらいがちに執拗に押しすすみ、ついにその湿り気をおびた繁みに達した。中指がその無秩序の中心にある、じつとりと柔らかな入り口に触れたとたん、女は感電でもしたような叫

び声をあげ、われとわが身を呑みこんだ。女は自分が水になり、手が魚になったような気がした。た。

林白『愛する人と別れないで』

こうした自分に対する凝視と愛撫はかなり早い時期、とても信じられないくらい早い時期からはじまった。幼稚園にいたころ、五、六歳の頃のことだった。

これは人に知られてはいけない、よくないことだと分かっていた。見回りの保母がやってきて、今にもわたしのベッドに近づきそうになる。その足音を聞くと、わたしはすぐに動きを止め、目を閉じて眠っているふりをした。

それは慢性的な欲望だった。夏の長たらしい昼のあいだ、蚊帳もつらず、ベッドとベッドのあいだを仕切るものもなく、保母の目があますところなく光っているような場合には、わたしはみんなが寝入り、最後に保母も寝に行ってしまうまで待つて、それから安心して自分の動きを開始した。

保母の当直用の大きなベッドは窓ぎわにあり、わたしとベッドとのあいだにはいくつもの小さなベッドが並んでいた。わたしは自分のベッドに横たわり、たくさんの小さなベッド越しに、保母の高くて大きなベッドの方を見た。その上には長い上着やズボンが置いてあることもあったし、時には淡いブルーの薄絹のスカートが、あるいは黒い綿シルクのスカートや胸元に花の刺繍の入った白い半袖のシルクのブラウスが置いてあったりした。

昼寝の空気は粘り気を帯びていた。夏は蟬が鳴いているほかは、すべてが粘りついて、青息吐息

になつていた。黄先生は近眼なのに、眼鏡をかけず、人を見る時は目を細めた。当直の大きなベッドに居るのが彼女なら、心配はなかつた。黄先生はけつして叱らないから、恥をかくことはない。昼寝の粘つこい空気が大きな寝室全体に充滿し、誰もがみな粘りついて、あたりの空気は水のように、わたしを浮かび上がらせた。

真昼は光線が強烈なので、目を閉じても遮るものもなく、むき出しになつて居る感じがした。近くのベッドからは、寝返り、歯ぎしり、大きな物音、天地をどよもすような足音が聞こえ、なんと興ざめな昼だったことか！

夜がやつてくる。

夕方はお遊戯をし、それから教室に入つて、椅子に座る。椅子は薄緑色で、机はなかつた。先生がお話をしてくれるか、みんなでいっしょに歌をうたうか、などなどをした。それから何か食べる。わたしは食いしん坊ではなかつたが、食べることを拒否したことはなかつた。時にはヤマモモが二個、時にはフルーツ・キャンデー一個、あるいは芭蕉バナナだった。それはふつうのバナナより大きく、大蕉タイチホオ（料理用バナナ。五尺バナナ）より小さくて、「サイゴンバナナ」と呼ばれていた。サイゴンとどんな関係があるのだろうか。時にはキウイフルーツかグアバのこともあつたが、一番はライチで、それはわたしたちの町で豊富に産出されるおいしい果物だった。夜はたいいていパイヤを食べた。金紅色の果肉は厚くて甘く、サネは黒いメノウのよう。パイヤの木は形が変わつていて、まさに亜熱帯の美しい果樹と言えた。それがひと切れずつに切りわけられてから、順番にもらいに行くのだ。それ

から並んで手を洗いにいき、並んでトイレに行く。みんな両手を前の人の肩におき、汽車になつて、口の中でゴトンゴトンと言いながら行進する。汽車は洗面台からトイレへ、それから寢室へと走っていく。寢室の入口には先生が立っていて、ひとりひとりの額にさわる。しよつちゆう誰かが熱を出したからだ。数珠つなぎになつて中に入ると、声も立てず、靴を脱いで、ベッドに横たわる。保母が蚊帳をおろすやいなや、ベッドは天井もドアもついた小部屋に早変わりする。誰もやつて来るはずがない。灯りが消えたとたん、壁が分厚くなつて、誰の姿も見えなくなる。安心して自分を水に変え、手を魚に変える。魚が滑りだし、鳥が飛ぶ。声を出しさえしなければ、足音がやつて来ることはなかつた。

この方法はずっと続いて、今に至っている。長い年月のあいだに、蚊帳は共犯者となつた。蚊帳だけが完全に自分を人から隔離してくれ、安全だつた。

鏡を見ること、そして秘密の場所を見ることが好きだつた。亜熱帯の長い夏の夜、個室になつたバスルームで水を浴びるとき、長いこと自分の身体を見つめ、それから愛撫した。八歳の頃、自分で左の乳房に硬いしこりがあるのに気づいた。母が北京から来ている医療隊に見てもらいに行こうと言つた。自転車の後に座り、B鎮から新墟まで十五里（一里は〇・五キロ）の道のりを、太陽に頭のとつぺんをさらしながら行つた。医療隊は人民公社の衛生院にいた。母があの人たちはみんな専門家ののだと言つた。標準語には一種の權威があつたし、しかも気さくでやさしくしてくれた。それから母の勤めている県の病院に戻り、薬局へ薬をもらいに行つた。中に入ると、四方はみな瓶ばかり

で、様々な色の水や錠剤や箱があった。葉はとてもいい匂いがして、清潔な、独特の匂いが、母の服や髪の毛に残った。わたしの葉は水菓で、いくつかの大きなガラス瓶に入っていた。半透明の水や濁った水を混ぜあわせたものだ。白い沈殿物があり、口に入れると酸っぱい味がした。酸っぱくてスーッとしていた。葉局の大人が、どうしてこんな小さい子に乳房のしこりがあるのかしらと言った。母はどうしたのかわからないのだと話した。同僚に、あんな、どうやって気がついたのと訊かれ、母はこの子が自分で搔いて気がついたのよと答えていた。

性と関係のある遊戯もしたことがある。ぜつたい遊戯だ。本にこうある。男の子と女の子が性交のまねをするのは一種の遊戯なのであり、大人は慌てる必要はない。それは生理的構造が未成熟で、この種の性交が実現するはずがないからだ。同性間の遊戯はわたしと莉莉のあいだで行なわれた。わたしは六歳、莉莉は七歳だった。莉莉は近所の子で、彼女の母親は北京の人だった。その遊びをしたのは屋根裏部屋にあった模型と掛図、それにお産のせいだ。わたしの母が計画出産を宣傳する仕事をしていたため、屋根裏部屋に肌色の人体模型が積んであった。プラスチックあるいは石膏で作られた男女の生殖器の模型は、新奇で、神秘的なまま、雑然と積まれていた。何もすることのない午後、こっそり屋根裏部屋に上がってみると、生殖器たちが断面を見せていた。血の色も露わで、獐猛な感じがした。一番多いのは肌色で、手で押すと、柔らかいのもあり、硬いのもあった。音の出るものもあったので、びつくりして冷や汗をかいた。音の出ない物には、大胆になって力を入れてよく見た。誰もいなかった。大人は農村に行つてしまい、莉莉はまだ引越して来てい

なかった。幼い女の子がひとり、乱雑に積まれた生殖器の模型の中に立っている光景は、何とも奇な図だ。世界中で、多米トオミのほかに、こんな幼児期を過ごした人がいるだろうか！

わたしの幼児期をふり返ると、屋根裏部屋の薄暗い床の上に生殖器の模型が肌色の花のように咲いていて、そこにひとりの子どもがうずくまり、いつまでもそれらを食い入るように見つめている。それがしばしば目に浮かぶ情景だ。

子どもが生まれるところを見るのはとても刺激的なことだ。産婦人科の病室には濃いブルーの布のカーテンが掛かっていた。窓台が高いため、上によじ登らなければ、よく見えなかった。わたしはよじのぼったことはない。爪先立ちしても見えないので、すこし離れたところに立って、必死で飛びあがった。体が上に行った時でも、ただカーテンに目をあてているだけでは見えない。飛びあがった瞬間に、風がカーテンをめくりあげてくれなければだめなのだ。これまでそんなにうまいことは起こらなかった。他にも窓があつて、ちょうど分娩台に向きあっていた。けれどもそこへ行くには建物のうしろにまわつて、勒魯レロ（葉にとげのある植物）の垣根にもぐりこみ、ガラスの欠片のあるところを踏んで歩かなければならなかった。しかも大人に発見される恐れがあるので危険と困難がいつばいな上に、うまい具合に子どもを産んでいるところに出遭わなければ見られない。ついあるとき、二万五千里の長征の末、その窓口に達した。カーテンが開いていて、女の人が分娩台に横たわっていた。両股がひらかれ、屋根裏部屋にある模型のような陰部が生々しくその体についていた。遮るものもなく、最大限に開かれている。その眼はたとえようもないくらい恐ろしげだつ



た。まるで、壁にかかっているのを見慣れていた風変りな絵が、ある日とつぜん動きだして、中から人が抜け出てきたみたいで、びつくり仰天して魂も吹きとんだ。その危険な窓口にしがみついていたわたしは手足が萎え、下に落っこちてしまった。もう一度よじ登った時にはすでにカーテンが閉じられて、何も見えなくなっていた。話し声や器具の触れあうカチャカチャという音、そして水の音が聞こえた。結局、赤ん坊の生まれるところは見られなかった。

赤ん坊はどうやって生まれてくるのか。それは秘密の問題だった。あるとき、誰かが路上で子どもを産んだという話を聞いた。臨月の女の人がよろよろしながらグラランドを通りぬけている時に、赤ん坊が出てきてしまった。大勢の人が見に行き、グラランドの石の腰かけのまわりに幾重にも人垣を作って、視線を遮ってやった。その後、女の人と赤ん坊はよそへ移され、人々もいなくなった。石の腰かけに近づくと、血だまりができて、赤黒く光っていた。子どもを生むのはとても危険なことなのだ。血が出て、時には死んでしまうこともある。このことをわたしは早くから知っていた。危険なことはいつもわたしを惹きつける。一種の誘惑だ。わたしは恐れと興奮を抱いて、一日また一日と危険な日の到来を待ちうけた。あたかもそれが楽しい日でもあるかのように。

ひよつとしてわたしは潜在的なマゾヒストなのだろうか？

長い幼児期のあいだに、結局わたしはこの目で赤ん坊の生まれるところを見たことはなかった。宿舎からそう遠くない、産婦人科の入口にあるビワの木の下にばら木陰では、次々に赤ん坊が生まれた。母は、赤ん坊というのはひとつながりで生まれてくる、ある日は男の子ばかりだったかと思

うと、別の日は女の子ばかりだと言った。まるであらかじめそう仕組まれていたかのよう、予定どおりに生まれてきた。平穩な日々のなかでも、時には頭がないとか頭がふたつあるといった異常児が生まれることがあった。そういう赤ん坊は、まっ黄色の厚い藁紙にくるまれ、白い作業を着た雑役係が、病院の裏山に持って行って埋めた。穴の堀り方が浅いため、夜になると野良犬が、昼間掘った穴をほじくった。大人が死んでもこの山に埋められ、もつと遠くに行くことはなかった。もつと遠くの山は石山だった。桂林の山水のようにきれいな独特の形をしていて、まるで仙人でも住んでいそうな山だったが、死人を埋めることはできなかつた。土がないのである。人を埋める山は螺嶺ネソリと呼ばれ、神秘と恐怖の場所だった。その後防空壕を掘ったとき、この螺嶺で大人たちがたくさんの白骨を掘りだした。頭蓋骨は年月がたちすぎて、誰のものかも分からなかつた。子どもたちは昼間、見学に連れて行かれた。戦争用の壕は大人の腰くらいの高さで、子どもの頭の高さもなかつた。深い場所の土の匂いがしんと全身に迫ってきた。夜は、B鎮の上空で防空演習の警報がウーウーと鳴りひびくこともあった。そんな時は、大人も子どもも布団の中から起きだして、黒か濃い色の服を着なければならなかつた。懐中電灯をつけてもいけないし、マッチをつけてもいけない。泣いても叫んでもいけない。すばやく山の上の防空壕に移動しなければならなかつた。それは毎回とも嘘だったが、毎回の嘘が真に迫っていた。

入り口を出るとすぐ大通りだった。他に道がないので、死人を埋葬する時はかならずその前を通らなければならなかつた。時には六、七人の老若男女が白い布を縫いつけた靴をはき、頭に白い布

を巻いて、大声で泣き叫んでいた。それはB鎮の年寄りが亡くなったのであった。時には黒い喪章をつけ、花輪をかついだ行列が出た。これは役所の人間が亡くなった時である。彼らはわたしの家の入り口を通って、病院の死体安置室まで行く。安置室のドアが開いて、黒か暗紅色の棺桶が出てくると、付き添って山に登る。山には一面、ベージュ色の小さな花の咲く、細長くて臭いにおいのする葉の木が生えていた。木の名前は分からないが、B鎮の花輪は一律にこの木の枝と葉でできていた。死体安置室と病院のトイレは中庭をひとつ隔てただけで、ほとんどつながっていた。中庭には草がびっしり繁っていたが、繁つていながらも荒涼とした感じがあった。トイレに行く時は、すぐうしろの死体安置室が気になった。曇りの日や夜は、塀ひとつむこうの裏庭に幽霊が漂っているのではないかと想像した。幽霊はどんな格好をしているのだろうか？

一時期、毎晩死ぬことを想像した。母方の祖母は、父さんさえ死ななかつたら、あなたはキャンデイやビスケットがたっぷり食べられたのと言った。死ぬってどういうことなのと、わたしが訊くと、祖母はこう答えた。死ぬって言うのは、あなたの父さんのように、もう二度と会えなくなることさ。父さんはどうして死ななきやならなかつたの？ 病気で死んだんだよ。病気になるければ死ななかつたの？ 人は誰でも死ぬものさ。あたしはいつ死ぬの？ 祖母は、トオミ多米はまだ小さい、多米はまだ大人になっていない、まだ何十年も後だよと答えた。わかつたわ、おばあちゃんが死んだらママが死んで、ママが死んだらあたしが死ぬのね。おばあちゃん死ぬのが怖くないの？ 祖母は、あたしは年を取ったら、怖くなくなつたよと答えた。

わたしは毎晩たくさん夢を見た。身内が死ぬ夢で、祖母の時もあるが、母のことが多かった。まるで江姐チアンシェ（羅広斌、楊益言の小説「紅岩」を原作とする映画「烈」）や韓英ハンイン（映画「洪湖赤衛隊」の主人公）みたいな、映画に出てくる革命家のようなだった。鉄鎖が夢の中でジャラジャラと鳴り、母のまわりに巻きついている。母には流れ弾に当たって、地面に倒れていた。ある時は血だるまになり、夥しい血を流していた。わたしは夢のなかではつきりと意識した。母さんが死んだら、あたしはほんとうの孤児になってしまう。まだ八歳なのに、どうやって自分を養ったらいいのだろうか？ 夢から醒めるとたいいてい汗でびっしょりになっていた。けれどわかっていた。夢から醒めたということは、あの恐ろしい場所から脱出できたということだ。わたしにはわかっていた。母さんは死んでなんかいない、ただ農村を巡回しているだけだ、わたしは孤児なんかになってはいない、ただひとりで家で寝ているだけなのだ。祖母も田舎に帰ってしまった。そんな夜は、孤児ではないにしても、やつぱりものすごく怖かった。掛け布団しか自分を覆うものがないので、目を閉じればたちまち夢の世界へ、というわけにはいかなかった。

後になって、自分が死ぬ夢を見るようになった。

わたしはいつも誰かに追いかけられていた。どんなに逃げてでも隠れても必ず捕まってしまう、それから大きな扉に押しつけられ、銃口を向けられる。銃口の照準が合った瞬間、わたしは、これではんとうに死ぬんだ、もう二度と生き返れないのだと思った。次の瞬間、真っ赤な閃光が走り、胸元がごとく熱くなった。夢の中でわたしはほんとうに死んだ。